



1999年 新春号



建設が進む西梅田ガーデンシティ（新梅田シティより望む）



新春に思う

支部長

真塚 達夫

新年あけましておめでとうございます。12年前の卯年は平成改元前のバブル景気突入前夜の静けさで、夜明け前の期待の年がありました。関西支部も創立6年を迎え、組織としての形が備わってきた感がありました。CAD化元年とかハイテク化が進み、構造技術も空気膜構造・免震・Hi-RCと一步一歩着実に進んでいました。

一方クラゲのようなポストモダンとかラスベガスの看板のポストモダンとか、構造技術者にとっては、感覚とか感性のみの論理的にひとりよがりのデザイン屋の作品を疑問符付きでにがにがしく思っていました。その後バブル景気からそれが崩壊し平成大不況に突入し、住専から始まった不動産問題から金融不安不況へと政策不況と重なっていこうに明るさが見えない状況となりました。「経済不況の5割は不安心理」と言いますが、根本的な少子化・高齢化の対策が進まない

中で、少しづつの公共事業の対策とか商品券構想では景気振興策とならず、雇用不安と失業率の増加とあいまって、明るい21世紀を迎える夜明け前にしては余りにも闇が深すぎます。

今年が日本経済の底で、企業のリストラ・体質改善に時間がかかっても、2000年には夜が明けるよう、卯年のジャンプ力に期待して不況トンネルを出口に向かって猛スピードで飛んでいきたいものです。光が見えれば始めたもの。内需拡大と雇用創出には消化不良をおこさぬ必要な公共事業投資が切り札となって欲しいものです。悲観気分を楽観論に変えるのは強い意志であり、建設に携わる私達から背筋をピソと伸ばして歩き始める必要があります。



年頭にあたり

副支部長

馬瀬 芳知

年頭にあたり、一言ご挨拶申し上げます。21世紀到来も秒読みとなった今、しっかりしなければならない日本経済が、国民の切なる期待を裏切り、相変わらず低迷と混乱を続け、好転の兆しさえ見えないのが現状ではないでしょうか。

さて、我々構造技術者の身辺も、決して穏やかなものではありません。企業倒産、リストラと、敗戦後かつて経験した事のない様な規模で推移しており、まだ予断を許しません。この様な状況の中、昨年建築基準法が改正され、間もなく政令、告示、通達などが出来事になります。構造設計法も、いよいよ仕様規定から、性能規定へと変革され、我々の設計業務もより一層多様化し、選択肢も増え、設計の自由度も拡大するものと思われます。その反面、構造技術者の資質と責任の所在が今まで以上に問われるところになるでしょう。

いざれにしろ今年も大変な年になる事は間違なく、覚悟をきめて取り組まなければなりませんが、努力した者は、少しは報われる年であって欲しいと念願いたします。

特集：「おもしろ工法紹介」

前号に引き続き最近の注目プロジェクトを紹介します。今回は特に工法上の特徴のある物件を3件。



(仮称) NHK大阪放送会館及び大阪市立新博物館・考古資料センター複合施設の遺構保存工法
日本設計関西支社
中本 浩二

1. 概要

本プロジェクトは、難波宮跡と大阪城公園の連続一体化構想の一環として、現NHK放送会館を中央体育館跡地の北側に移転し、さらに大阪の歴史的ルーツでもあるこの場所に歴史系総合博物館としての新博物館・考古資料センターを一体の複合施設として建設するものです。

大化改新（西暦645年）にともなう難波遷都以来8世紀末までの約150年の間難波宮は、日本の首都として、また副都として、古代史上に大きな役割を果たしました。昭和29年以来、長年にわたる発掘調査の結果、前期・後期二つの時期の難波宮跡が、中央区法円坂一帯に広がっていることが明らかになりました。

今回敷地は、難波宮跡の西北端に位置し、前期難波宮の管理棟・倉庫群・堀等の遺構（主に柱穴）が存在しています。

これらの遺構を計画に取り入れながら、施設配置を行ない、さらに遺構を保存しながら建設するよう要請されました。

〔建物概要〕

建設場所：大阪市中央区大手前4丁目
建築面積：7488m²
延べ面積：89986m²
階 数：NHK 地上18階地下3階
博物館 地上13階地下3階
建物高さ：NHK 134.965m
博物館 83.340m

工 期：1997年12月～2000年4月

2. 敷地周辺の遺構

敷地周辺には、以下に示す6種類の遺構があり、いずれの遺構もG.L.-0.7m～2.5mの範囲に存在しています。

- ① 前期難波宮の並び倉
- ② 前期難波宮の倉庫群管理棟
- ③ 前期難波宮の倉庫群
- ④ 前期難波宮の北側を区画する堀
- ⑤ 前期難波宮の西側を区画する堀
- ⑥ 5世紀後半の大形建築群16棟



配置図

そして、遺構について、以下の範囲で保存するよう要請されました。

①、②、③は、柱穴だけでなく、建物が存在したと想定される範囲を保存する。

④、⑤は、堀に沿って直線上に存在する柱穴を保存する。

なお①は、建物の外部に保存し、②、③、④、⑤は、保存するが建物の内部に取り込んでもよい。

3. 遺構の保存

遺構の保存については、日本建築センターに「NHK大阪放送会館等複合施設遺構保存工法技術指導委員会」の設置を依頼し、検討を進めることになりました。

そして、遺構を保存するにあたって、以下の3条件を満足することが求められました。

(1) 遺構は現状保存すること。

遺構はそのままの状態で保存するものとし、遺構の周辺は補強するが、遺構そのものには人的加工は施さないものとすること。

(2) 工事中の変形と振動の影響を極力抑えること。

工事中の掘削作業や重機の移動により、遺構が影響を受けないようにすること。

(3) 現状の含水比を保持すること。

保持する程度は、ひび割れが発生しないで、崩壊しない程度とすること。

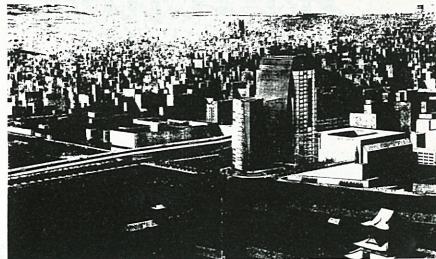
以上、与えられた保存条件を満足する工法として「パイプルーフ工法」を採用することとしました。パイプルーフ工法は、一部の地盤との連続性を保ちつつ、遺構を仮支えしながら、本体工事を行なう工法です。

4. 遺構保存工法

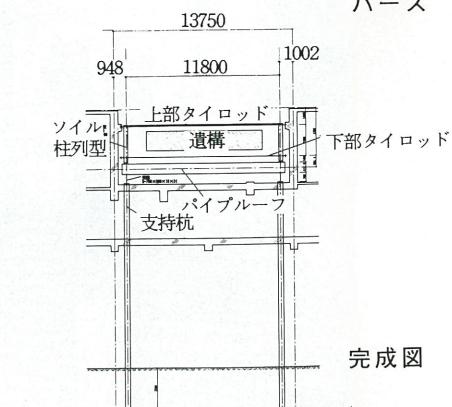
パイプルーフ工事は、地下の逆打ち工事と平行して進めるもので、以下にその概要を示します。

- (1) 遺構上部に保護コンクリート打設
- (2) 地下逆打ち用構造柱の埋設
- (3) 遺構支持杭・山留SMWの埋設
- (4) 上部タイロッド取付
- (5) 下部タイロッド取付
- (6) パイプ（鋼管）圧入
- (7) 受梁架設
- (8) 1階床軸体工事
- (9) B1階床梁鉄骨取付
- (10) B1階床コンクリート打設
- (11) 地下軸体完了
- (12) 支持杭切断

これまでパイプルーフ工事は完了しますが、1998年12月10日現在、(9)段階に一部取りかかった所です。いずれの段階においても、保存の3条件を満足するように、計測を行ないながら、慎重に工事を進捗しているところです。



パース

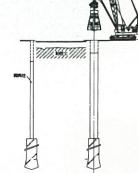


完成図

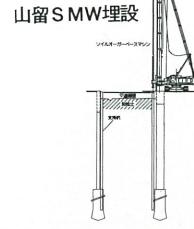
1. 保護コンクリート



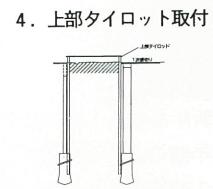
2. 構造柱埋設



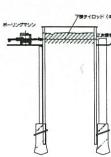
3. 遺構支持杭



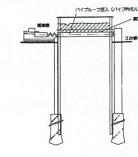
山留SMW埋設



5. 下部タイロッド取付



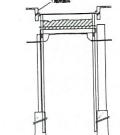
6. パイプルーフ圧入
(短辺方向)



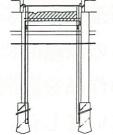
7. 受梁架設



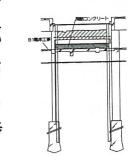
8. 1階床軸体工事



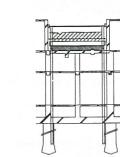
9. B1階床梁鉄筋



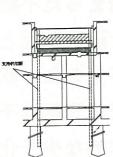
10. B1階床
コンクリート



11. 地下軸体完了



12. 支持杭切断



施工順序



愛媛県美術館

日建設計

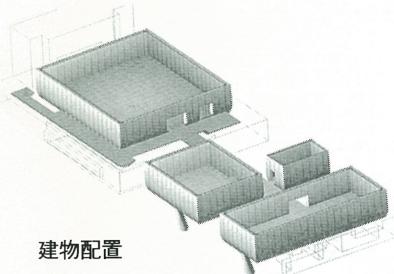
陶器 浩一

この建物は国指定史跡である松山城の堀之内に建ち、敷地からは、木々の緑ごとに城山の秀麗な眺望が広がっている。

周辺の環境との調和が特に求められたこの建物の設計に当たっては、それ自体が威圧感を与えることなく、「さりげなく」存在しているように自然の中に溶け込ませることが最大のテーマであった。

建物の1階をオープンなエントランスゾーンとし2階に各部屋ごとに展示室を分棟配置し、それらを渡り廊下でつなぐことにより、周囲の自然を建物で分断しないようにした。

この建物の構造計画を行う上での最大のポイントは、建物の圧迫感をなくすため、1階部分をいかに開放的にできるか、であった。

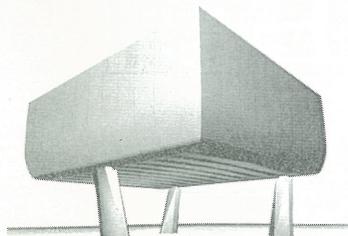


建物配置

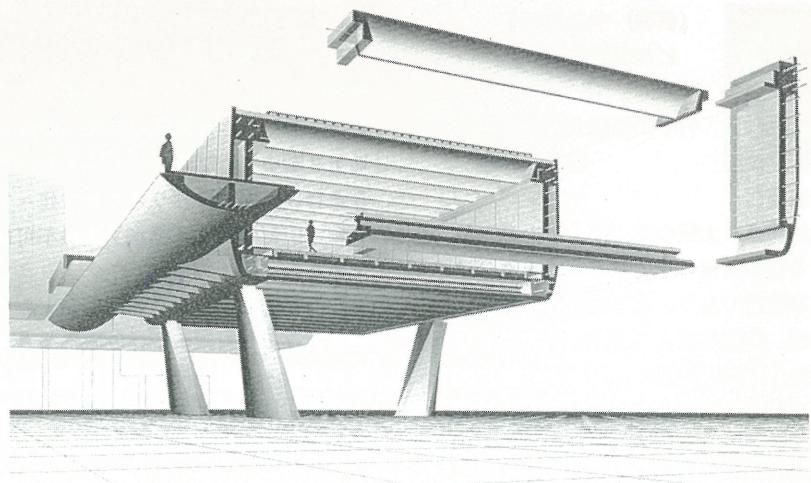
『閉じた箱』の展示室を浮かす

建物の2階に分棟配置した展示室は、機能上四周を壁に囲まれた整形な形をしている、「閉じた箱」である。箱といふものは、完全に閉じていればねじれにも抵抗する「剛強な」構造となる。これを利用して、この「閉じた箱」を3本の独立した柱で浮かせることを試みた。建物を正面から見ると、真ん中に柱が1本だけのヤジロベーのような形態をしているが、どちらかに傾こうとすると箱全体がねじれ抵抗し、後ろの2本の柱で踏ん張ることになる。

この作用により、3本の独立柱で支えた「閉じた箱」をあらゆる荷重に対して安定した構造としている。



独立柱と「閉じた箱」



プレキャスト版により組み立てる

この「箱」を構成する要素、つまり、壁・床・屋根すべてを工場製作のプレキャストコンクリート版とし、現場にて組み立てる圧着工法を採った。幅1.8mをモジュールとしたそれぞれの版を並べ、中に挿入したPC鋼線を緊張することによってそれを連結させて組み立てて行く。

この工法を採った理由はPC構造的一般的な特徴である、工期の短縮・現場作業の省力化・熱帶木材型枠使用の抑制・軸体の高品質化もあるが、最大の理由は次の2点である。

1. 美術館の特徴ある形状の精度確保と美しい打ち込みタイル壁の実現
2. 美術館の最大の課題であるコンクリートから発生するアリカリガスの早期低減化

圧着工法にて組み立てられた「箱」は、それを支え1階のエントランスホールの大空間に象徴的に立っている3本の「彫刻柱」と共に、建物を特徴あるものにしている。

綿密な施工計画

PC構造といふものは現場作業は効率よく省力化が図れるが、そのためには部材製作・運搬から建方・緊張作業にわたるまでの十分な施工計画、つまり「仕込み」が肝要である。PC版部材点数は全部で470ピース、緊張する鋼線・鋼棒は約2000本という膨大な数であったが、大きく分けて4棟とそれらを連絡する渡り廊下から構成されるこの建物の施工手順を綿密に組み立てていった。

架設順序は、

1. 独立柱とそれに連続した外周鉄骨を組み立て、床版を敷き並べる。

2. 外周梁と床トップコンクリートを打設、緊張する。(床の完成)

3. 幅1.8mモジュールの壁版を床上に並べ壁と床を圧着、その後壁間に目地コンクリートを打設し、壁版相互を圧着する。(壁面の完成)
4. 屋根版を架設・トップコンクリート打設・緊張する。(箱の完成)
5. 最後に、渡り廊下版を架設・圧着する。

以上の手順を採った。

この建物には、様々な技術・工法が全体の中に秘められている。それらが決して誇示されることなくさりげなくこの地の歴史環境と共生し融合することで建物ははじめて息吹を与えられるのだと思う。



建物正面



エントランスホール



(仮称) 中之島M T
ビル新築工事

竹中工務店大阪本店
青木 和雄

1. 概要

本建物は、大阪の中心部、中之島に位置する複合賃貸ビルである。地上部分は主に事務室であり、地下部分は機械室、駐車場、店舗等により構成されている。外装は石打込PCa板とし、大阪の歴史的地区を代表するにふさわしい形態と外観をもつ計画としている。敷地内には大深度地下を有する三井物産ビル（地上13階、地下5階）、幸ビル（地上9階、地下2階）の2つの既存建物があり、これらの解体後、三井物産ビル部分に高層部を新築する建替工事である。

〔建物概要〕

建築場所：大阪市北区中之島2丁目
設計：日建設計、竹中工務店
建築面積：2,173.66m²
延べ面積：54,696.52m²

階 数：地下4階 地上23階 棟屋1階
構造形式：プレースを含むラーメン構造
主柱断面：コンクリート充填円形鋼管
主梁断面：溶接組立H型鋼

軒 高：99.95m

最高高さ：104.95m

工 期：1997.2～2000.2

2. 架構計画

ロングライフオフィスとしてフレキシビリティの高い空間を確保することを目標とし、明快な架構計画を心がけた。柱は耐力・変形性能に優れたCFT柱を採用し、梁降伏先行型を原則とした部材設定をしている。

上部架構は両方向とも地震時のエネルギー吸収装置としてアンボンドプレースを配置している。アンボンドプレースは、芯材に低降伏点鋼（LYP235）を用い、材軸中央部を小断面とした変断面プレースとし、制震ダンパーとして適切な層せん断力レベルで降伏させている。このアンボンドプレースの設置によりレベル2地震時の応答値を最大25%程度低減している。

また、両妻面のロングスパン（25.6m）部の歩行振動に対する居住性改善のため、床制震ダンパーを各階に2台ずつ設置している。

3. 地下構工法

新旧建物の建替計画にあたっては次のような大きな制約を受けた。

・既存建物べた基礎底版下レベルがGL-22mの大深度であり、約18t/m²の高被圧を受けていたため、浮き上がり対策を講じなければ既存躯体の解体が地上9階までに制限される。また、既存建物は敷地境界ぎりぎりまで建っており、山留の施工、遮水工法が不可能である。

・基礎形式として、通常の杭基礎とした場合、浮上り対策・解体制限により多大な工費・工期を要し、直接基礎とした場合、地震時に浮上りが生じ、耐震性が十分とはいえない。

これらの制約に対し、設計当初から施工側と綿密な調整を行い、建築計画としては既存地下躯体内に新築建物を収める計画とともに、構工法として下記の方法を採用することにより解決を図った。

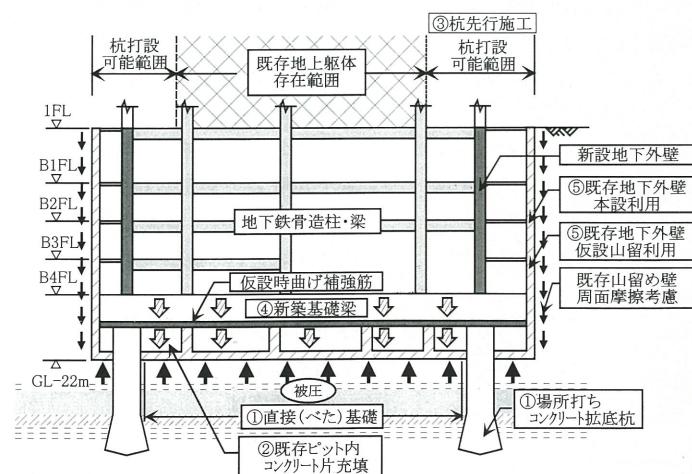
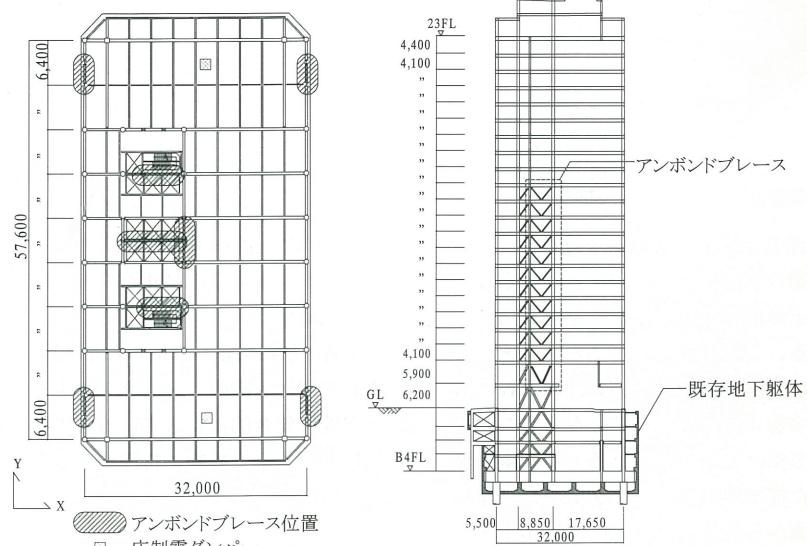
・建物短辺方向端部の杭基礎、杭と杭の間のべた基礎（沖積砂層支持）を併用した「パイルド・ラフト基礎」の採用（図-3①）



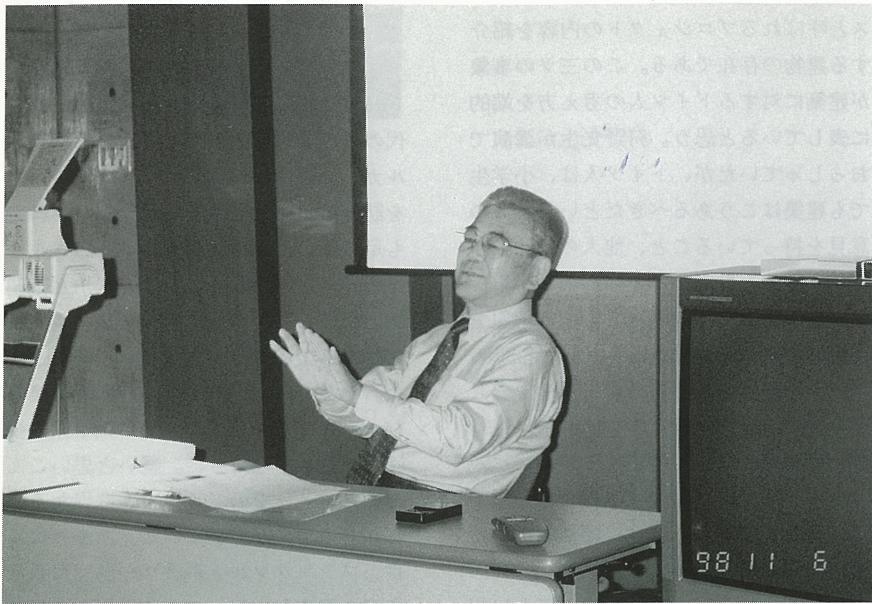
・施工時の浮上り対策として、既存ピット内への地下躯体解体コンクリート片充填（同②）、地上既存躯体を残した状態での杭先行施工（同③）、既存地下躯体を残した状態での新築基礎梁構築（同④）

・既存地下外壁の仮設山留壁利用および本設利用（同⑤）

このように、既存躯体を有効利用した計画により、要求される性能・コスト・工期を満足するとともに建設副産物の低減を実現している。



第7回 J S C A 京滋会講演会報告



京都・滋賀地域の勤務者や在住者の有志の方々を中心に行っているJ S C A 京滋会も7回目を迎えました。

今回は、福井工業大学教授で、京都工芸繊維大学名誉教授でいらっしゃいます石田修三先生をお招きして「塔の力学」と題したお話を聞くことができましたので概要を報告します。

石田修三先生と言えば、コンピューターを駆使し、骨組の臨界現象を解明するための複合非線形有限要素法の開発者としてご存知のことと思います。先生は、これを「表の顔」と呼ばれています。では、「裏の顔」はとすると、「五重の塔は地震でなぜ倒れないか」という塔の研究者としての「顔」をお持ちです。先生は、16、7年前に「心柱門説」という仮説を提唱され、この命題をずっと温めて来られました。今日は、「表の顔」の話ではなく、「裏の顔」の話を伺いました。

〔層塔の構造〕

五重の塔に限らず層塔の平面は、正方形がほとんどである。その中央に心柱が貫通し、相輪を支えている。重層の屋根を持つ塔体がこの心柱を囲っているが、心柱と塔体とは屋根の露盤部で間接的に接しているに過ぎない。塔体の軸部を構成する柱として、大抵は、外側に12本の側柱、内部に4本の四天柱が配置され、その他は普通の堂宇の構造と類似してい

る。これらの柱は、斗きょうと積層井桁（何段かの井桁に組まれた梁材）を介して各層の屋根を支えているが、通し柱にはなっていない。即ち、地震を受けると互い違いに揺れる構造になっている。

〔動きのメカニズム〕

このような構造をもつ層塔が強い地震を受けたとしたら、塔体と心柱はどう振るまうであろうか。塔体がわずかに波打っている微小振動の領域を超えてあわや倒れんとする直前の状況（臨界状態）を考えてみよう。

揺れが激しくなるにつれ、塔の軸組や樹組を構成している木材はそれまでの連続的な伸縮や曲がりによって形態を維持しようという状態を脱して、継手や仕口といった接合部に不連続なガタが生じ始めるであろう。特に前述の様に、心柱以外の柱は通し柱でないことは、層毎に不連続な横揺れ（せん断振動）を許すこととなり、それが昂じるとやがて心柱は周囲の積層井桁と接触もしくは衝突することになる。

つまり、臨界状態近傍における層塔の動きを支配する本質的性格は、(1)層毎に柱が剛体回転をすること、(2)心柱が積層井桁と衝突すること、の2点にあるとみなせる。このように抽象化することによって、以後の挙動を簡単な実験用概念モデルあるいは数値解析モデルによってシミュレートすることが可能となる。

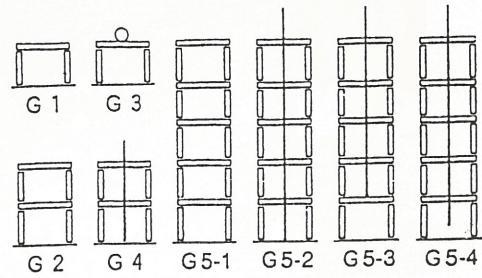


Fig. 2-1 Model Frames

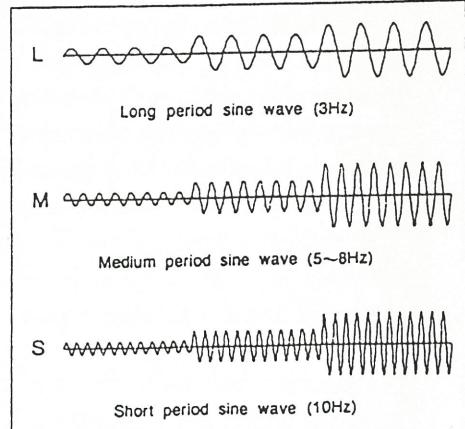


Fig. 2-2 Ground Motions

〔模型実験と考察〕

一連の簡単な模型振動実験より次のように考察される。

層塔は弱い地震には「柔」で臨み、強い地震には、足元で免震、上部で鞭振りによるTMD型制震、臨界状態近傍では心柱を介しエネルギーを逃がすという極めて巧妙な自己組織化によって対抗している。

〔結び〕

臨界状態近傍において心柱が全体システムの安定化に寄与していること、即ち心柱と塔体の接触離反の繰り返しが動きの均衡（balanced-movement）を生みだし、全体システムの倒壊を遅らせていることが判明した。これらから、心柱は、それが如何なる意図ならびに方法をもって立てられたにせよ、木造層塔の制震に寄与しうるものであると認識するに至った。

以上、たいへん含蓄のあるお話を聞かせていただきました。その後、懇親会にうつり、ここでも先生を囲んで有意義な時間を過ごすことができました。

（株）安井建築設計事務所 大淵敏行

第11回 J S C A 関西支部海外研修会報告 (10/3~11、中欧)



□はじめに

関西支部事業委員長

辻 幸二

厳しい不況の中、今年は参加者が少ないのでなかろうかと危惧したが、幹事の企画力と近畿ツーリストの努力による低コストの賜物か、他支部の2名を含めて総勢35名の参加を得て、ベルリン、プラハ、ウィーンを視察した。10月3日(土)に関西空港を出発して、10月11日(日)に帰国するという日程で、5日間の休暇取得で9日間の旅を楽しむことができた。真実を言えば、私自身この研修旅行に参加するのは初めてである。若葉マークを付けた初心者が団長はどうなることやらと心配したが、旅慣れた団員に引率されて、旅行中何事も無く無事に帰国できることで安堵している。又、今回の研修旅行では、ベルリンでも活躍されている神戸大学の狩野教授に御同行して頂いて、ドイツ人の考え方やベルリンの建築事情についての御講演を承った。視察地の三都市の詳細報告は、松村、高木、大内山の三氏にお願いすることにして、私は全体の思い出を簡単に述べる。

秋というには残暑が厳しい日本から飛びたった一行を待ち受けていたのは、ベルリンのみぞれ混じりの真冬の気候だった。ベルリンは首都機能の移転を控えて、建設ラッシュの真っ盛りで、特にポツダム広場ではレンゾ・ピアノ、ヘルムート・ヤーン、磯崎新等の著名な建築家の手によるビッグプロジェクトの建築工事が進行中で非常に活況があった。工事現場を概観して驚いたのは、仮囲、養生ネット等が無く施工中の建物がオープンに見ら



れること、道路の上空を横断する赤と青のパイプの存在、そしてインフォボックスと呼ばれるプロジェクトの内容を紹介する建物の存在である。この三つの事象が建築に対するドイツ人の考え方を端的に表していると思う。狩野先生が講演でおっしゃっていたが、ドイツ人は、小学生でも建築はこうあるべきだという各人の意見を持っていること、他人の建物に対しても堂々と批判するということから、プロジェクトの推進者はあらゆる情報を市民に提供する義務があり、逆に推進者はそれを逆手に取り自分の正当性をPRする為にインフォボックスの存在がある。赤と青のパイプは、地下水位の高いベルリンの地下工事で発生する地下水の還元用の配水管である。環境に配慮しているのが非常に良く理解できた。

他にも、プラハ、ウィーンと楽しい思い出は尽きないが紙面の都合で割愛する。



□ベルリンを訪ねて

(有)松村構造計画

松村 和夫

念願が叶いドイツのベルリンを訪れる事ができた10月3日は東西に分断されていたドイツが統一されて8年目を迎える記念すべき日であった。市街はお祭りに集まった人々で混雑し、いたるところで行われている交通規制を避けながら私たちを乗せたバスはテーゲル空港から旧東ベルリンの中心地に位置するフォーラムホテルに到着した。

関西新空港での集合時間から数えて延べ19時間を要して、ようやくのベルリン到着である。すでに私の保有体力は限界を越えているにも関わらず日本からトランクに詰めて持ち込んで来た期限の来た幾つかの仕事を処理し、日本へのFAX送付が終わったのは東の空が白むころになってしまった。

かくして実に長い長い一日が過ぎ去り、高層ホテルの窓より見下ろすアレクサンダー広場を行き来する人影も絶え、日本より約一ヶ月早い気候のせいか異常な寒さを感じて思わず窓を閉じた。

17世紀にフリードリッヒ大王によって敷かれたウンター・デン・リンデン通りに並ぶ2、3世紀前の建物や歴史博物館古



代の都市遺跡をそっくり移設展示したペルガモン博物館、川岸に並ぶノミの市等を訪れるがとても時間が足りない、脚力も足りない。当初計画していた西ベルリンのクーダム地区には時間的に殆ど絶望的となってしまった。ブランデンブルグ門で西地域の土を踏んで折り返すこととなつた。そこでは昨日のお祭りの余韻を楽しむイベントが催されていたが日本人の姿は殆ど見かけなかった。堅いと思いこんでいたイメージのドイツ人とは異なる陽気なドイツ人がそこにいた。あまりにも良いフランクフルトの香りの誘惑に負けて実に美味しいビールと共に屋台で少々休憩。多忙の中の時間割いて無理をして来て良かったと思った瞬間である。

夕刻、ホテルで団長の神戸大学教授の狩野忠正先生の講義を拝聴する、ベルリン変遷と近況、ドイツ人の暮らしや物の考え方、特に住宅や都市に対するドイツ人のこだわりなどのお話は実に興味深く、ドイツ人の心の内にあるものを学んだ。翌日一行は先生を中心としてレンゾピアノがマスター・プランを行ったポツダム広場周辺で大規模に行われている建設現場の様子を見学した。道路を挟んでソニー地区とダイムラー・ベンツ地区に分かれ、ベンツ社の本社ビルは竣工後間もない自然環境を種々考慮した我々が参考とすべき新社屋であった。首都移転でベルリン市内では至る所で建設が行われており、かつてのバブル期の日本を思い起こさせる状況である。

次に都市景観の配慮を行い設計された地下競技場(ベロドーム)を見学した。設計者より設計コンセプトの説明を受け、豊かなアイデアにただ納得するばかりであった。壁崩壊後都市再開発が進みベルリンは変革期を迎えての東側に残る中低層住宅群はいずれ近代化の波にその姿を消してしまうのではないか。日本の都市部の様な無秩序な都市形成ではなく、自然や環境の充分な配慮がなされた調和のとれた近代的歴史都市と発展していくことだろうと今回の研修旅行を通じて予感した。



百塔の街、プラハ

トリスミ集成材株

高木 和芳

10月6日午後、E-15号線をひたすらバスで登り靄に包まれたエルツ山地の頂上付近（海拔680m）に現れた国境を通過。わたしの中に描いていた、中世以来様々な歴史に翻弄されてきた悲劇を持つ「チェコ」のイメージと、ちょうどこの時、深い霧に太陽の光が遮られ、薄暗くなつた国境を越えることが、さらにこの国への期待と魅惑を感じさせた。

国境を越えると今度は曲がりくねった国道をひたすらボヘミア盆地に向かって下るのであるが、道路脇の至る所になにやら怪しげな女性が派手な服装で、

“Spring Sale”をしている姿が目に付く。さすが、と感激（？）をしながら都心部に向かう。

車窓より中央駅、国会議事堂、国立博物館を眺めながら今夜の投宿先であるアンバサダーホテルのあるバーツラフ広場に降り立った。ここで目にした事が、また“さすが”と驚かされるのである。駐車違反を取り締まっていた二人の警察官（一人は女性）と駐車違反をした一人の男性とが、なにやら盛んに口論をしている。しばらく続いたがこの男性がおもむろにトランクから缶詰め二個を取り出し警官のジャンパーに押し込んで、“一件落着”警察官は何事もなかったかのようにその場を立ち去ったのである。

さて、こんな事ばかりでチェコに感激をしているわけにはいかず、肝心のプラハについて以下に紹介をしよう。

ホテルから北へ数分も歩けばそこがもう旧市街地広場である。広場の右手には、14世紀から16世紀に建てられたゴシック様式のティーン教会がそびえ、左手には、ロココ様式のコルツ・キンスキ宮殿、そしてバロック様式の聖ミクラーシュ教会がある。各時代の美しい建築物が数多くあり古き良きヨーロッパのおもかげをいまに残している。神聖ローマ帝国の首都であったプラハは、本来ウィーンよりも都会であったが、1939年、チェコスロバキアはナチス・ドイツの野望に屈し、チェコはドイツに併合、スロバキアはナチス・ドイツの傀儡国家となった。

そして1945年、ドイツ第三帝国の敗北により終結した第二次世界大戦後、チェ

コスロバキアは、再び独立国家としてよみがえった。だが、この新生の希望に満ちた独立も東の間のことであり、ソ連による東欧支配の強化と、米・ソ冷戦の激化にともない、チェコスロバキアは、中欧の要衝の地にあるために自由と独立を奪われることになり、1948年ソ連ブロックに組み込まれた。

そして、1968年、自国の主権と自立的な社会主義建設を掲げた民主化運動（プラハの春）により、ソ連を中心としたワルシャワ条約軍の軍事介入（チェコ事件）が起こる。

1989年11月ソ連体制の崩壊にともない、再び民主化に進むのである。

このように多くの歴史に翻弄されてきた、プラハの町の滞在時間は、20数時間、何かを見落とした感じで、少々心残りであった。いつの日か機会があれば、もう一度いこう。!!

ウィーンの“怪しい魅力”

大内山建築構造事務所

大内山 正英

旅行5日目、朝プラハを発ったバスは夕闇迫る中、ウィーンの街に入って行った。ウィーンは13世紀にハプスブルグ帝國の首都となって以来、640年間にわたって栄華を極めた都市である。

ハプスブルグ帝国の都、森の都、音楽の都、美と退廃の世紀末の都市等、都市ウィーンを形容する言葉は多々ある。

又、オペラ、ウィーンフィル、カフェー、コーヒー、ワルツ、リングストラーセ等々、私達が知っているウィーンを語る言葉もありにも多い。しかし実際は宮廷文化の継承よりも19世紀に台頭してきた市民階層が形作ったものが大半である。それで「急激に拡大した都市の抱える矛盾に絶望した19世紀末文化」を代表する人達が建築家オットーワーグナー、アドロフロース、「接吻」の画家クリムトであろ

うか。現代では、建築家ハンスホライン、フンデルトバッサーが重厚な秩序の中に新しいデザイン感覚を持ち込んでいる。ベルリンの合理性、機能性中心の街と違った、ウィーンの“怪しい魅力”にどっぷり浸かってみたい、そんな気持ちであった。

夕方、ウィーン見学の最初に、ヴェルベール上宮を散策した。この宮殿は17世紀にトルコ軍からウィーンを救ったオイゲン公の夏の離宮であるが、下宮の向こうにウィーンの街がゆったりと見下せる庭園の雄大さに圧倒されたのであった。そしてこの上宮は美術館としてクリムトの絵を置いている。明日から始まるウィーン視察を楽しみにさせるに十分な仕掛けであった。

二日目は、午前中に緑を屋上やバルコニーに取り組んだ郊外の集合住宅、フンデルトバッサーが改修したごみ処理場と市営住宅、オットーワーグナーの郵便貯金局を見学した。午後は、シュテファン大聖堂、オペラハウス周り、シューンブルグ宮殿、等々、書ききれない。その時々には狩野教授が時代背景を踏まえて建築・都市について分かりやすく説明をされ、理解が深まった。その中でもオットーワーグナーのシュタインホフ教会では、崇高とも思える聖堂内部の白大理石のデザインに深い感銘を受けた。イスタンブルのドームの中では、その圧倒的迫力の前ではひれ伏すことしか思いつかなかつたが、この教会では肉体さえも昇華していくような錯覚さえ覚えた。

三日目は自由行動の日で、ツアーデザルツブルグまたはブタペストに足を延ばされた方も多かった。私は、ウィーンの町を1日かけて散策した。1日フリー券でリング沿いに走る路面電車を何回乗ったことか。そして仕上げは、220円を払ったオペラ座での「リゴレット」の立ち見であった。

しかし私が思うに、ウィーンは今や宮廷文化と19世紀末の遺産の上に立つ観光都市となり、確かに次から次へと優雅で洗練された仕掛けがあふれてきて、私達を飽きさせない。廻ってきたベルリン、プラハと現在建国の緊張感ある国々と違つて、成熟しきってしまったのか。20世紀末に、全世界に発信するものは何だろう。

カフェーでローリーしたザッハトルテのあの甘さに“現代の怪しい魅力”はとろけてしまったようだ。



郵便貯金局



俣野 博さんを偲んで

関西支部長 真塚 達夫

謙虚な人であった。心くばりの豊かな柔軟な人であった。数々の思い出のシーンがよみがえるたびに、涙腺がゆるむ。

還暦を目前にして豊かな人生の決算をこれからという時に、10月23日あっと云うまもなく惜しまれて天国に召された。

通夜・告別式には各地から京都迄、各々400名を越す人々が参列され生前の俣野さんを偲び、その人柄が語られた。

いかに生き、いかに死ぬかが人生にとって最も大事なこととわかっているが、長寿礼賛で人生の質を問わず量で決まる最近の社会風潮に否ともいわず、淡として不安に対応している私たちに対して、彼は充実した質で人生を全うした。

株竹中工務店の大坂構造設計部のトップとして社内外の人望を集め、J S C Aでは創立以来16年間にわたり、関西支部

の事務局長を経て副支部長を、本部との関わりが最も深い理事として、まさに関西支部の生みの母、育ての母とも云える人であった。これから基準法改正に伴う性能設計法のJ S C A基準の推進者で関西支部の旗振り役として期待されていた。後輩の指導にも大阪大・大市大へと講師とし忙しい時間をさかれていた。

阪神大震災後の後始末で構造技術者の使命感と責任感に燃え、日夜東奔西走の過労がたたったのか、ここ2年入退院をくり返されてはいたが、元気な姿で今年のSEWC'98でJ S C A関西支部のリーダーとして7/16から7/23のサンフランシスコで活躍され、安心していたのに……。

毎年のJ S C A関西の海外研修会には必ず参加され、第1回から第10回の総括を昨年当誌にまとめられた。今年の第11回はドイツ・ベルリンへ是非行ってみたい企画の中心となり神戸大学の狩野教授をコーディネーターにと自ら依頼にかけたが、残念ながら今回は10月初めの頃となり見合せられた。J S C Aの旅では毎回ルームメイトとして共に行動し、日頃の仕事から開放されリラックスできる10日間を見るもの、聞くもの、グルメ

もゴルフも一緒にあった。ショッピングでは家族への思いやりもみせ、またJ S C A本部の事務局の女性へと心をくばられた。11年前になるが、ゴルフも第10回J S C Aゴルフ大会では、第1回のソウルへの海外研修旅行直後にも拘わらず優勝され、パワフルなスイングが印象に残る。最後のゴルフは昨夏の7月7日で医師の許可のもと炎天下のもとがんばられた。葬儀の日奥様からその日が楽しみで十分満足された由をお伺いし、ほっとした。新しいクラブセットを買い直され、これから腕を磨くと楽しく話されていたのが心残りである。

若い時から山登り、テニス、ゴルフを楽しむスポーツマンであり、抜群のファイトで組合役員もこなし、本業の構造設計の他に、建築学会・建築士会・建築士事務所協会・日本建築協会・B C Sとあらゆる団体の幹事役として活躍された足跡を振り返るとJ S C A関西支部にとってだけでなくほんとうに学界業界団体の皆さんに愛され、惜しまれた人であったと思う。

素晴らしい人生を精一杯生き抜かれた今、どうぞ安らかにお眠り下さい。合掌

J S C A会第30回記念大会

1998年11月17日 晩
於 センチュリー吉川GC
*印 初参加

第30回記念大会 優勝 丈野 栄三
支部長杯取りきり 優勝 下橋 勝(第15回～第29回優勝者対象)

| 順位 | 氏名 | アウト | イン | グロス | H C | ネット |
|------------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 優勝 | 丈野 栄三 | 45 | 46 | 91 | 23 | 68 |
| 2 *江辺 文彦 | 41 | 53 | 94 | 24 | 70 | |
| 3 馬場 芳知 | 39 | 41 | 80 | 9 | 71 | |
| 4 北畠 憲雄 | 49 | 54 | 103 | 32 | 71 | |
| 5 大西 博 | 53 | 54 | 107 | 36 | 71 | |
| 6 安田 光世 | 43 | 45 | 88 | 15 | 73 | |
| 7 小松原 雄操 | 46 | 48 | 94 | 21 | 73 | |
| 8 伏見 光男 | 48 | 51 | 99 | 26 | 73 | |
| 9 後藤 文吉 | 50 | 45 | 95 | 21 | 74 | |
| 10 杉村 光雄 | 44 | 50 | 94 | 20 | 74 | |
| 11 *横沢 泰英 | 43 | 56 | 99 | 25 | 74 | |
| 12 真塚 還夫 | 41 | 46 | 87 | 12 | 75 | |
| 13 谷尾 俊弘 | 49 | 48 | 97 | 22 | 75 | |
| 14 下橋 勝 | 48 | 39 | 87 | 12 | 75 | |
| 15 土井 祥栄 | 53 | 54 | 107 | 32 | 75 | |
| 16 竹内 忠彦 | 49 | 41 | 90 | 13 | 77 | |
| 17 尾崎 忠義 | 45 | 44 | 89 | 11 | 78 | |
| 18 宮本 義博 | 45 | 48 | 93 | 15 | 78 | |
| 19 山崎 勇 | 48 | 41 | 89 | 11 | 78 | |
| 20 杉森 泰元 | 46 | 54 | 100 | 21 | 79 | |
| 21 三好祐司 | 54 | 57 | 111 | 32 | 79 | |
| 22 脇山 広三 | 57 | 54 | 111 | 31 | 80 | |
| 23 宮野 順三 | 59 | 45 | 104 | 24 | 80 | |
| 24 新保 勝浩 | 57 | 49 | 106 | 26 | 80 | |
| 25 長田 正男 | 58 | 54 | 112 | 31 | 81 | |
| 26 犬飼 一夫 | 55 | 49 | 104 | 23 | 81 | |
| 27 山田 祐治 | 45 | 57 | 102 | 21 | 81 | |
| 28 江西 修 | 51 | 49 | 100 | 18 | 82 | |
| 29 *橋本 健男 | 54 | 48 | 102 | 20 | 82 | |
| 30 平見 殖 | 49 | 50 | 99 | 16 | 83 | |
| 31 西座 広昌 | 54 | 52 | 106 | 23 | 83 | |
| 32 藤原 敏夫 | 50 | 44 | 94 | 10 | 84 | |
| 33 唐木実 周成 | 55 | 49 | 104 | 19 | 85 | |
| 34 *福山 国夫 | 54 | 55 | 109 | 24 | 85 | |
| 35 多賀 秀俊 | 55 | 55 | 110 | 24 | 86 | |
| 36 勝丸 文彦 | 56 | 62 | 118 | 31 | 87 | |
| 37 *北山 恒尚 | 61 | 55 | 116 | 28 | 88 | |
| 38 *橋詰 義光 | 58 | 51 | 109 | 21 | 88 | |
| 39 日下部 弘 | 56 | 56 | 112 | 21 | 91 | |
| 40 松浦 英一 | 64 | 65 | 129 | 35 | 94 | |
| BB *竹之内 幸則 | 71 | 68 | 139 | 36 | 103 | |
| 42 塩田 丈二 | 70 | 72 | 142 | 36 | 106 | |

ペスグロ：馬瀬（13回目）
ニヤビン：横沢2 丈野 長田 尾崎 平見 下橋 新保
ドランコ：シニヤの部 真塚2 安田 安田（ジュニヤ分） 平見
ジュニヤの部 新保 橋本 北山
次回ハンディ：丈野16 江辺19 馬瀬8

第13回 囲碁同好会

平成10年11月7日 (土)

Aクラスの部

| | | |
|------|----|----|
| 優勝 | 亀井 | 四段 |
| 準優勝 | 山下 | 九段 |
| 3位 | 土居 | 三段 |
| 敗者優勝 | 野中 | 四段 |

Bクラスの部

| | | |
|------|----|----|
| 優勝 | 榎本 | 五級 |
| 準優勝 | 植木 | 初段 |
| 3位 | 荒川 | 初段 |
| 敗者優勝 | 山中 | 一級 |

支部だより

事業委員会 10/16
広報委員会 10/13
HPWG 10/7

講演会「塔の力学」石田修三福井工大教授 11/6
京滋会主催 参加者28名

杭lonビン・ローラー工法見学会
地盤系分科会主催 10/20 参加者 70名

公団西島住宅見学と講演 計画分科会主催
講師 曽田五月也早稲田大学教授
11/5 参加者 78名

「地盤の液状化について」地盤系分科会主催
講師 東畠郁生 東京大学教授
11/20 参加者 147名

海外研修

中欧(ベルリン、プラハ、ウイーン)建築視察
コーディネーター、狩野忠正神戸大学教授

10/3～10/11 参加者 36名

親睦会

囲碁親睦会 11/7 参加者 19名

ゴルフ親睦会 11/17 参加者 42名

編集後期

明けましておめでとうございます。

新春号の巻頭を賑わすべき俣野副支部長のおことばがいただけない寂しいスタートとなってしまいました。不況に負けず、真に社会に貢献できる活動を実践することで、俣野さんのこれまでのご尽力に報いたいものです。

(多賀、藤井)

発行 (社)日本建築構造技術者協会
関西支部事務局

〒550-0003 大阪市西区京町堀1-8-31(安田ビル3F)

Tel・Fax 06-6446-6223